

飯豊天皇 埴口丘陵墳塋護岸その他整備工事に伴う立会調査

はじめに

飯豊天皇陵は奈良県葛城市北花内に所在する前方後円墳である。平成 17 年度に埴口丘陵にトレンチを設定して事前調査を行い、その成果については本誌第 58 号で報告したところである⁽¹⁾。今回の調査は、埴口丘陵の護岸工事と併せて濠内堆積土の除去が行われることから、立会を行いつつ除去前に掘削可能な深度を把握することで、遺構・遺物に対する安全を確認するとともに、外堤側にトレンチを設定することで、事前調査の成果を補完するための一助とした。調査は、平成 18 年 12 月 18 日から 22 日までの期間で第 13～15 トレンチを、平成 19 年 2 月 26 日から 3 月 2 日までの期間で第 16～18 トレンチを本部職員立会のもと実施し、その他の工事期間については、監区職員が随時立ち会った。

1 トレンチの調査

(1) トレンチの設定

外堤については過去にも調査が行われているため⁽²⁾、重複することのないよう留意しながら 6 箇所を設定した（第 1 図）。また、前号でも触れたとおり現地は湧水が非常に激しいため、濠の中央付近での調査は難しく、現在の外堤石積に接する位置に設定した。

なお、トレンチ番号は、事前調査との連続性を重視し第 13～第 18 トレンチとした。各トレンチの状況は、基本的に事前調査時と大きな相違はないため、土層番号や内容などは本誌第 58 号を踏襲している。参考までに、土層の概略について再掲する。

I 層 表土。現在の埴口丘陵上面を覆う腐植土層。

II 層 濠内の表土。現在の濠上面を覆う腐植土層。

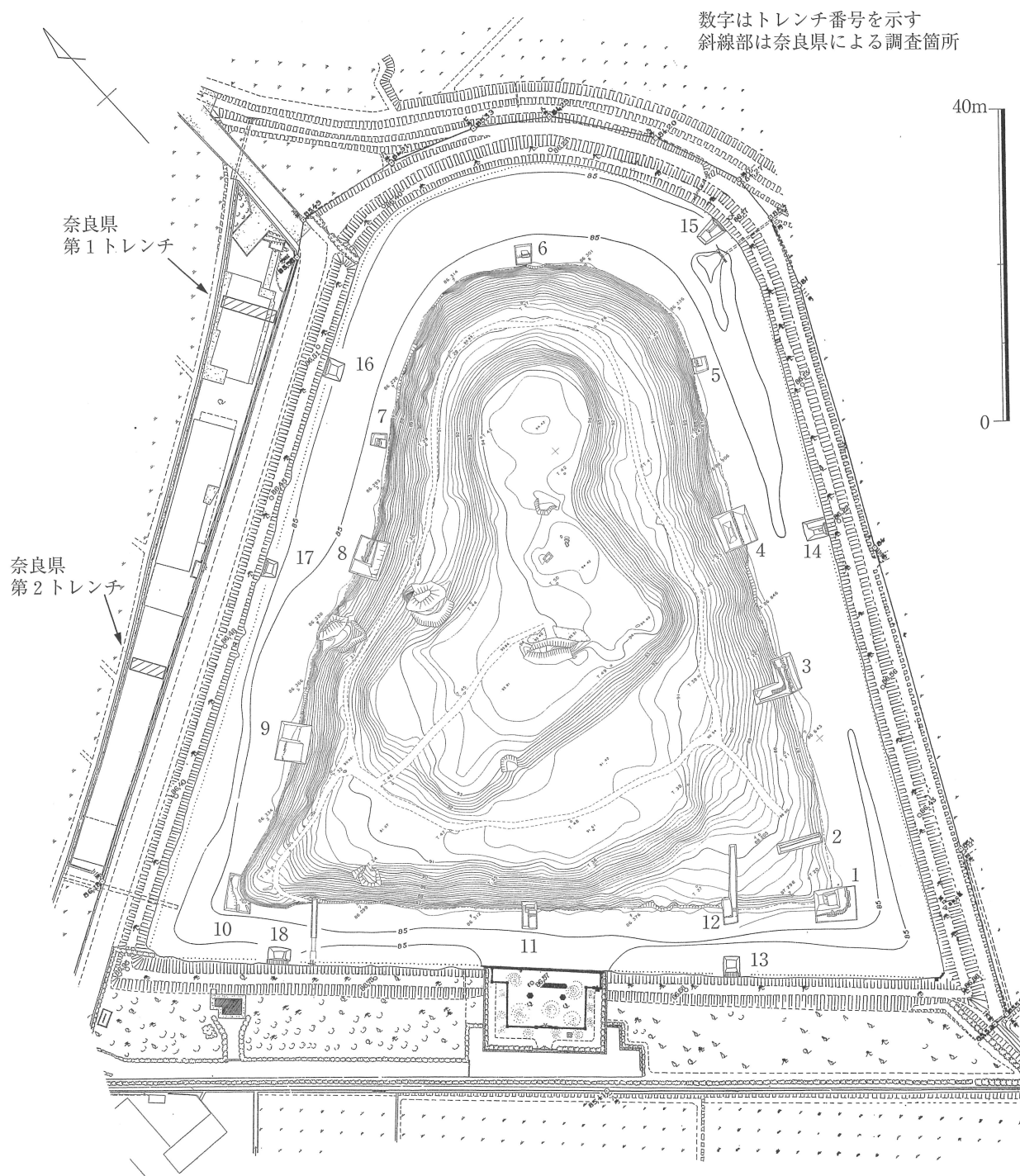
III 層 大正元年に行われた埴口丘陵への杭列設置工事以後の濠内堆積土。工事に関わる公文書が残っており、杭列の設置に先駆けて浚渫を行ったことがわかっている。埴口丘陵南側面は、概して工事図面等に表示された規模より大きく掘り込まれているが、杭列の背後がいったん深く掘り込まれたことによる段が形成され、この点が工事図面等と一致している。遺物は現代までのものを含む。

IV 層 「文久の修陵」時の盛土。トレンチの範囲内だけでも厚さ 2 m に達する箇所がある。細かい盛土単位は認められず、一気に盛土されたと考えられる。幕末期までの多様な遺物が含まれるが、陶磁器類が比較的顕著である。第 1・2・12 トレンチでは IX 層に含まれるものと同じ遺存状態の埴口輪片が多数含まれており、盛土にあたって新たに周濠内を掘削することで生じた土砂を利用したと考えられる。

V 層 「文久の修陵」が行われるまでの地表面を形成していた盛土。V a 層は、黒褐色を呈する旧表土で、埴口丘陵上に三歳山諸鉾八幡宮（以下、単に八幡宮と呼称）が造営されていた時期の地表面に相当すると考えられる。現在の埴口丘陵レベルに対応する。V b・V c 層は、粘質土と砂質土の違いで分層し得たもので、V a 層も含め大きな違いはない。なお、V 層の間に III 層が入り込んでいる状況になっているが、これは濠水の波浪などにより、埴口丘陵が抉られたために生じた崩落や流出によるものと考えられる。

VI 層 掘込みの埋土。第 2・9 トレンチでのみ確認されている。VII 層の上面から掘り込まれた遺構であり、VII 層が埋土となっている溝と位置が重なることから、その溝が再掘削されたものである可能性もある。端が断面にかかっているだけなので、規模や性格は不明であり、明らかな溝として扱うのは難しいが、本報告中では便宜的に「溝 1」として記述する。

VII 層 溝の埋土。石積遺構を保護するため掘り下げなかった第 3 トレンチを除き、すべてのトレンチで確認された。VIII 層や IX 層を切り込んで掘削されている。第 8・11 トレンチなどの状況から本来の埴口丘陵を削って掘り込まれているようである。基本的に粘土と砂が交互に堆積するような状況を示し、



第1図 埴口丘陵 トレンチ配置図 (1/800)

人為的に埋め戻されたのではなく、自然に埋没したと考えられる。遺物の量は概して少ない。詳細は後述するが、溝の掘削時期は中世であると考えられる。以下、「溝2」として記述する。

Ⅷ層 原初の堆積土(Ⅸ層)が形成されて以降、溝が掘削されるまでの間に堆積した土層。粘質土を主体とする。前方部前面部付近にあたる第1・2・10トレンチでのみ確認されている。

Ⅸ層 埴丘築造からそれ程時期を隔てずに形成された原初の堆積土。古墳時代の遺物のみを含むが、3つに細分された層ごとで、遺物の包含状況がめまぐるしく変わる。外堤の調査(3)で示されたⅥ層は本報告のⅨa・Ⅸb層に対応する。

Ⅸa層：植物遺体を高い密度で含み、暗茶褐色を呈する。埴輪片や転落した葺石も含むが、量は僅

かである。

Ⅸ b 層：植物遺体は顕著であるが、a 層に比べると密度はかなり低く砂質土が主体を占める。一方、大量の埴輪片や土器を含んでおり、Ⅷ層に帰属する遺物の大半がb 層から出土している。また、転落した葦石も多く認められ、その多くはc 層直上で検出された。

Ⅸ c 層：墳丘築造直後の崩落土。地山であるⅨ層の直上に堆積する暗茶褐色砂質土。植物遺体をb 層と同程度に含む。転落した葦石の数がごく僅かであり、遺物も含まれていないことから、墳丘が大きく傷み始める以前と考えられる。もしくは墳丘の立地が湧水のひどい場所であるため、墳丘築造に並行して、既に一部が崩落し始めていたことで形成された可能性もあろう。

Ⅹ層 地山。砂と粘土の堆積で形成されている。遺物の出土は認められず、第8・9・10・12 トレンチの状況などから、主として砂が主体をなすと考えられる。古墳時代以前の包含層の可能性も考えられるが、それを示すような遺物の出土は認められなかった。

(2) 土層の堆積状況

各トレンチとも同様の堆積状況を示している。また、濠内であるため墳丘側で見られた中～近世の遺構や盛土などは基本的には認められないため、比較的単純な層序を示す。しかし、一部V b 層と考えられる土層が確認できたため、江戸後～末期に墳丘周辺を整備した範囲を考える上で重要であろう。

また、現外堤石積基礎の胴木丸太はすべてⅨ層直上に設置されており、外堤付近は石積設置工事の際にⅨ層を残す形で浚渫されている。よって、攪乱を受けていない土層はⅨ層のみで、Ⅸ層より上の土層は新しい時期の堆積土(Ⅱ・Ⅲ)と考えてよい。

Ⅸ層は、分層の結果もっとも少ない第15 トレンチで1層、もっとも多い第16 トレンチで4層に分かれる。Ⅸ層上面レベルは第15 トレンチを除き、おおむね標高85 m～85.4 m付近であるのに対し、第15 トレンチは一箇所だけ低く標高84.6 mである。少なからず削平され、結果的に単一層になった可能性も考えられよう。また、分層された単位ごとの内容は墳丘側と基本的には同じであるが、堆積の上下関係はトレンチによって逆転しているなど一様ではない。

(3) 各トレンチの状況(第2・3図)

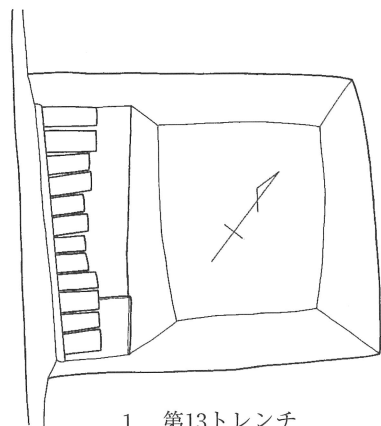
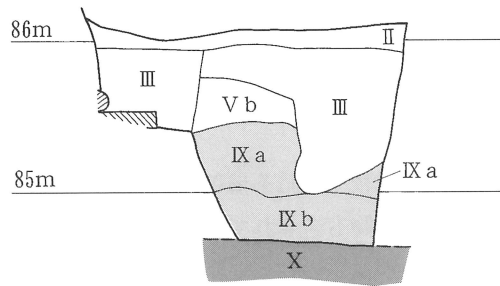
以下、番号順に状況を記述するが、第2・3図の図面配列は、ほぼ同じレベルにあるトレンチどうしを比較できるように、墳丘を挟んで北と南でおおむね対称の位置にあるものを、前方部側から横に並べているため、記述の順番と前後することをお断りしておきたい。

第13 トレンチ(第2図1) 事前調査における第12 トレンチの向かい付近に、長さ2.2 m×幅2 mの規模で設定した。Ⅲ層は一部Ⅸ層を削るように深く掘り込まれた箇所と石積設置の際の掘方の2つに分かれ、削平を免れたV b 層がブロック状に残存している。Ⅸ層は厚さ約75 cmで、a・b 層に分けられる。a 層は木片が多く遺物の出土量も多い。b 層は緻密な粘土質で、遺物の出土量は少ない。濠底面は平坦で標高84.7 mである。転落した葦石などは確認されていない。

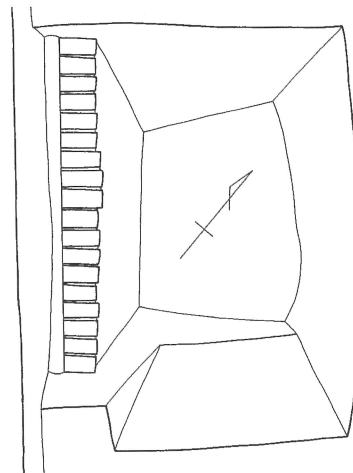
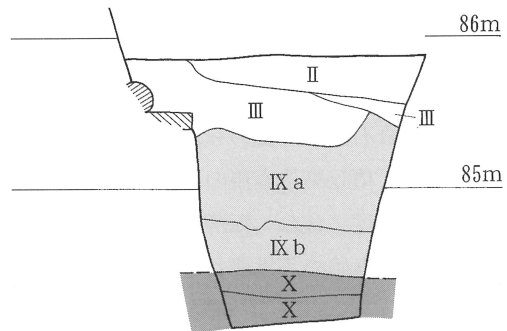
遺物は埴輪が主体であるが、須恵器・土師器も少量出土している。Ⅸ a 層からは器種不明形象埴輪片(第7図28)や土師器皿(第8図33)が出土した。特に土師器皿は平安時代のもと考えられ、沈み込みにより含まれた可能性は否定できないものの、Ⅸ層の形成時期を示す可能性のある遺物といえよう。また、V b 層からは瓦器碗片(第8図35)が出土している。

第14 トレンチ(第2図3、図版17-1・2) 事前調査における第4 トレンチの向かい付近に、長さ3 m×幅2.5 mの規模で設定した。やや厚めのⅡ層は周濠の中央に向かって下り、Ⅲ層も同様の状況を示す。Ⅲ層は図上でトレンチ外を右へさらに下るようであり、壁際では既にⅨ層を掘り込んでいることが確認できる。第4 トレンチでもⅨ層を深く掘り込むラインが確認されており、対応するものであろう。Ⅸ層は厚さ約70 cmで、a・b 層に分けられるが、第13 トレンチとは上下の関係が逆転している。濠底面は平坦で標高約84.2 mである。転落した葦石が2個確認されている。

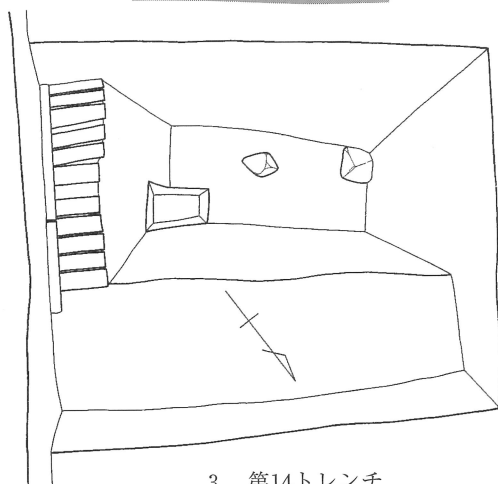
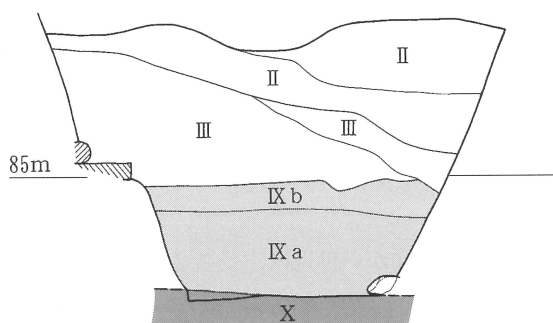
遺物は、Ⅲ層から播鉢小片が出土している。また、本トレンチでは上位に堆積しているⅨ b 層から、接



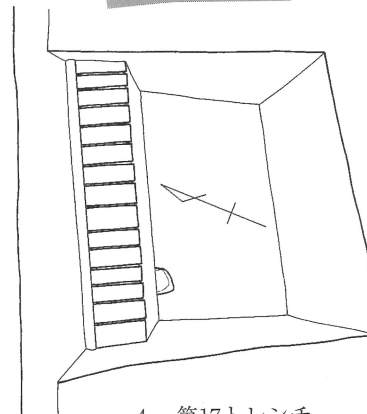
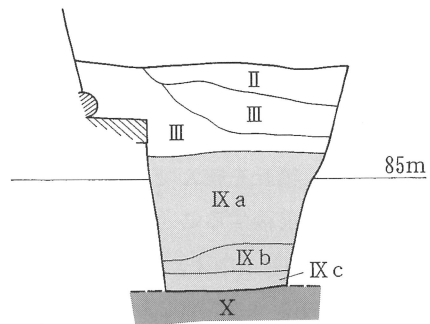
1 第13トレンチ



2 第18トレンチ



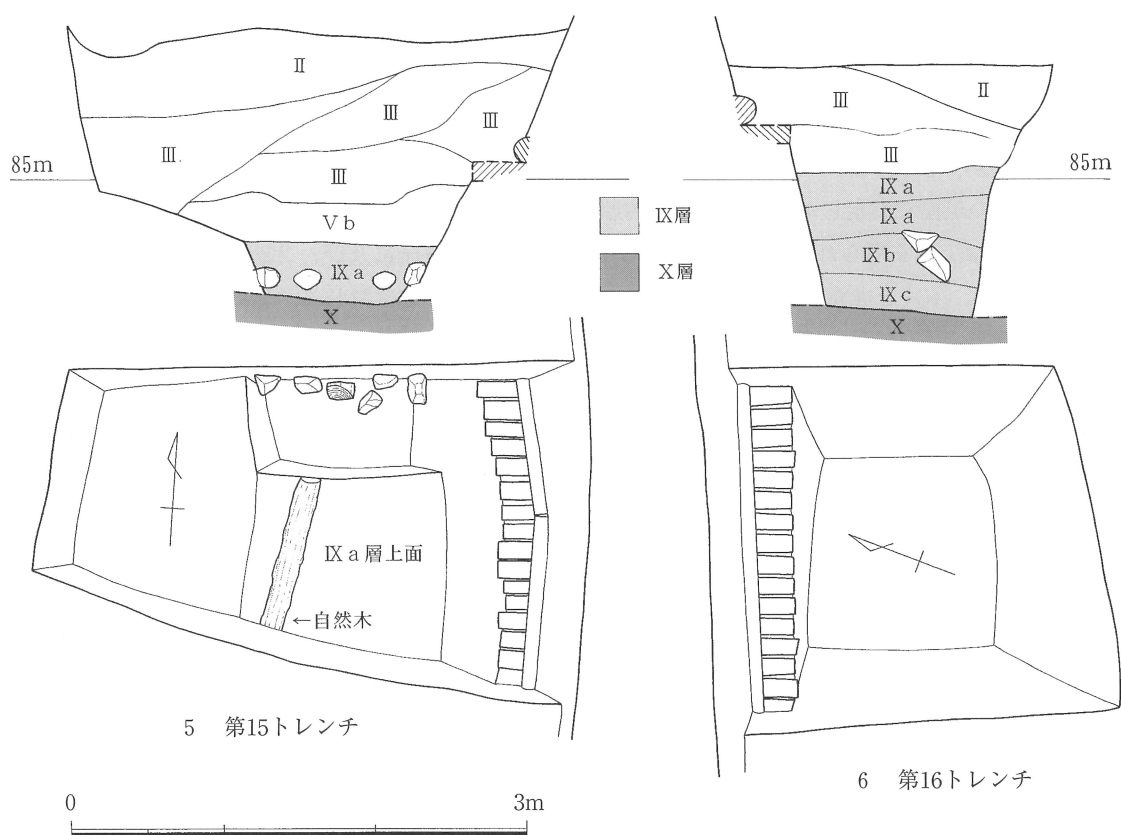
3 第14トレンチ



4 第17トレンチ



第2図 埴口丘陵 平面図および断面図 (1) (1/50)



第3図 埴口丘陵 平面図および断面図(2) (1/50)

合して完周する埴輪底部(第4図1)が出土している。

第15トレンチ(第3図5、図版17-3・4) 既設樋門の改修箇所に、長さ3.3m×幅1.5~2.3mの規模で設定した。本トレンチは地形的に低く濠内の水が集まるため、壁面が少なからず崩落した。安定した状態を維持するため崩落土は触らなかったため、最終的に2m×1.3mの範囲でIX層上面を確認し、濠底面はサブトレンチで確認するに留めた。II・III層の堆積状況は、第14トレンチと基本的に同じであり、少なくともVb層までは掘り込んでいることがわかる。IX層は厚さ約40cmで、先述のとおりIXaのみの単一層である。木片を多量に含んでおり、遺物の出土量も多い。濠底面は平坦で、標高84.2mである。濠底面直上では転落した葦石5個や自然木が確認されている。

遺物は、埴輪が主体であるが、中近世遺物も少量ながら出土している。III層からは磁器細片が出土している。Vb層と考えられる層は埴輪片の出土が目立つが、中近世遺物は出土していない。また、盾形埴輪片(第7図23)はIX層出土である。

第16トレンチ(第3図6、図版17-5) 事前調査における第7トレンチの向かい付近に、長さ2.4m×幅2.3mの規模で設定した。II・III層とも濠の中央に向かって下降する堆積を示すが、少なくともトレンチ内においては、ほぼ水平に検出されたIX層上面を掘り込んではいない。IX層は厚さ90cmに及び、4層に細分できた。a層は上2層分で最上層は細かい木片が多量に含まれるという特徴がある。また、a・b層は埴輪片を多く含むが、c層は遺物自体をほとんど含まない。第9トレンチのIXc層に酷似した様相である。濠底面は平坦で、標高84.1mである。IXb層中に転落した葦石2個を確認した。

遺物は、IXa層における猪形埴輪片(第7図26)・人物埴輪片(第7図27)、IXb層における動物埴輪の脚部の破片(第7図25)が特筆される。

第17トレンチ(第2図4) 事前調査における第8トレンチの向かい付近に、長さ2m×幅1.9mの規模で設定した。IX層は厚さ90cmに及び、3層に細分できた。a層が特に厚く約70cmを測り、倒木・木片等を

非常に多く含んでいる。これら木片等はb・c層である下位の層ほど、その量を減じていく。c層は黒褐色粘質土であり、やや他のトレンチのⅨc層とは異なった特徴をもつ。濠底面は平坦で、標高84.3mである。Ⅸb層中には石英閃緑岩の礫が少し含まれている。転落した葺石であろうか。

遺物は、Ⅸb層出土の水鳥形埴輪の頭部（第7図24）が注目される。

第18トレンチ（第2図2） 前方部正面の外堤、事前調査における第10トレンチの向かい付近に、長さ2m×幅2.5mの規模で設定した。Ⅱ層は比較的厚く、Ⅲ層はⅨ層の上面を大きく削り込んでいる状況が確認できる。Ⅸ層は上面を削られているにも関わらず、厚さ最大110cmに及び、2層に細分できた。a層が厚く約80cmを測り、木片を非常に多く含んでいる。木片等はb層で量を減じる。濠底面は平坦で、標高84.8mである。転落した葺石などは確認されていない。

遺物は、Ⅸ層から円筒埴輪の破片のみ確認されている。

以上の結果を踏まえ、「原初堆積土」に影響を与えないように、堆積土除去工事にあたっては、現在の濠内堆積土上面から－40cm程度に留めることとし、工事は予定どおり実施した。（清喜裕二）

2 出土遺物（第4～8図）

出土した遺物は277点である。そのうち埴輪が255点あり、全体の90%以上を占めている。埴輪以外では土師器が9点、須恵器が7点、陶磁器や瓦などが6点となっている。今回の調査ではトレンチが濠内の外堤側に設定されているため、近世遺物は非常に少なくなっている。また、埴輪は事前調査の時と同様に「原初堆積土」とされるⅨa、Ⅸb層から多く出土した。なお、遺物番号の脇にアラビア数字とローマ数字を括弧内に書いているが、これはアラビア数字がトレンチ番号、ローマ数字が出土層位に対応するものである。

（1）埴輪（第4～7図）

埴輪のおおまかな傾向については前号における事前調査の報告を逸脱するものではないので、胎土、焼成、色調などについては前号（本誌第58号）を参照されたい。以下では今回の調査で出土した埴輪について個々に述べていくこととする。なお、今回の報告では朝顔形埴輪が図示されていないが、これは破片が小さかったためであり、出土していないわけではない。

1～7は円筒埴輪の底部を含む破片である。1は底部が完周している。底面付近は自重によって歪んでいる⁽³⁾。第1段の外面調整はナデのみであり、第2段からタテハケがほどこされている。第1条突帯では、いわゆる「断続ナデ技法A」⁽⁴⁾が確認できる（写真1）。内面調整はナデで、底面付近では直径3mmほどの貫通しない刺突が1箇所みられるが（写真2）、意図は不明である。2～5は底部調整がみられる破片である。いずれの破片も外面に板状工具で押さえた痕跡を確認できる（写真3、4）。また、4、5の内面では底面付近が波打ったようになっている。なお、第1段高がわかる資料は1、2、7のみで、それぞれ11cm、11.4cm、10.3cmとなっている。

8～14は円筒埴輪の胴部の破片である。8はおそらく第2～4段にかけての破片であると思われる。外面調整は第2段がナデで、第3段がハケであるが、第2段の一部では第3段のものと対応するハケをみることができ、第2条突帯を貼り付ける前にハケをほどこしていることがわかる。また、第2、3条突帯の下部をみるかぎり、その後の調整によってその痕跡は消されているものの、これらの突帯は「断続ナデ」によって貼り付けられていたものと思われる（写真5）。9は上側の突帯の上部でいわゆる「L字痕」⁽⁵⁾ともいえるような工具痕がみられる⁽⁶⁾。13は8と同様、「断続ナデ」によって突帯を貼り付けていたものと思われる（写真6）。14はいわゆる「断続ナデ技法B」⁽⁷⁾とされる方法で突帯を貼り付けている。ただし、突帯の端面に木目の圧痕が観察でき、それらの切合い関係から考えて「断続ナデ」による貼り付け前に「押圧技法」⁽⁸⁾ともいわれる方法で突帯を圧着していたものと思われる（写真7）。なお、8、9、10、11、12で突帯間隔が計測でき、それぞれ9.3cm、9.5cm、12.7cm、11.3cm、10.3cmとなっている。

15～22は円筒埴輪の口縁部を含む破片である。15は復元すると口径31.6cm、口縁部高8.1cm、突帯間隔11cmとなる。上稜よりも下稜が突出する突帯の断面形状が特徴的である。こうした特徴的な突帯の形状は

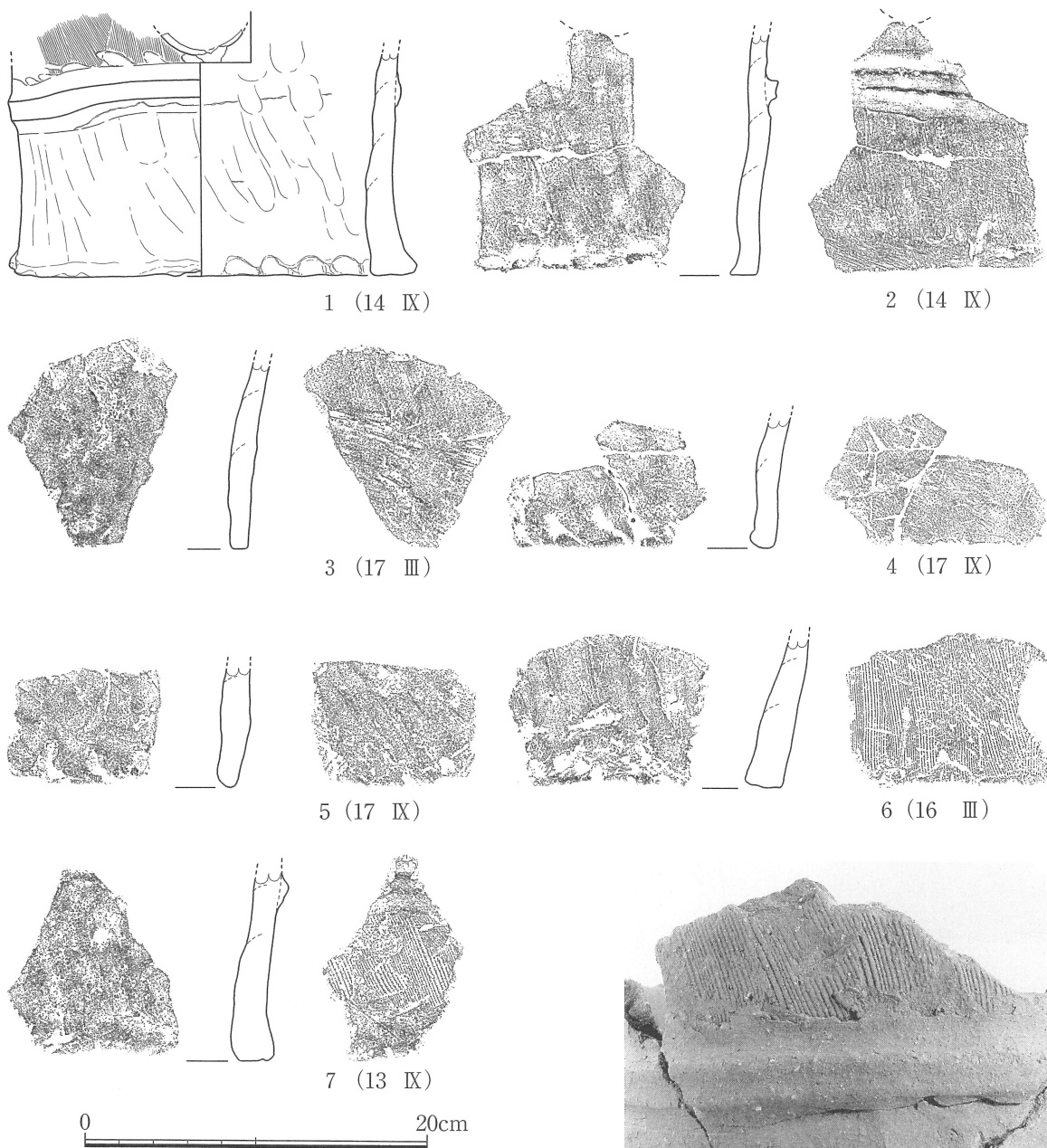


写真1 1の突帯付近



写真2 1の内面



写真3 2の外表面

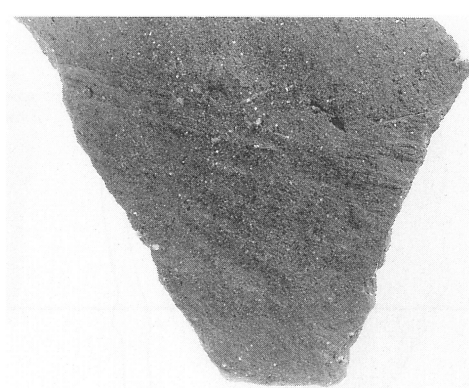
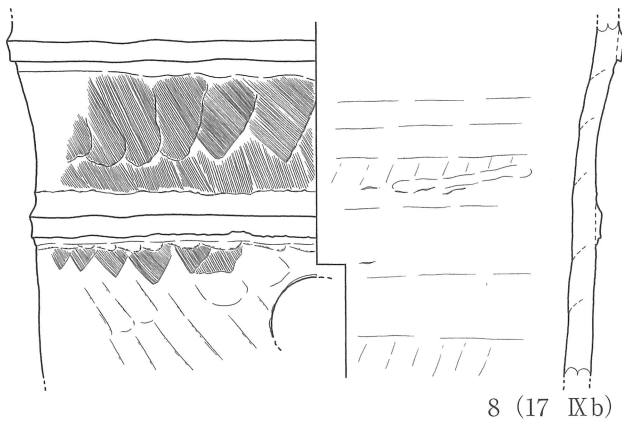


写真4 3の外表面

第4図 埴口丘陵 出土品実測図(1) 円筒埴輪底部(1/4)



8 (17 IXb)

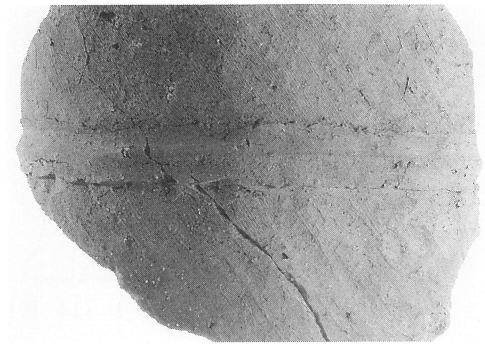
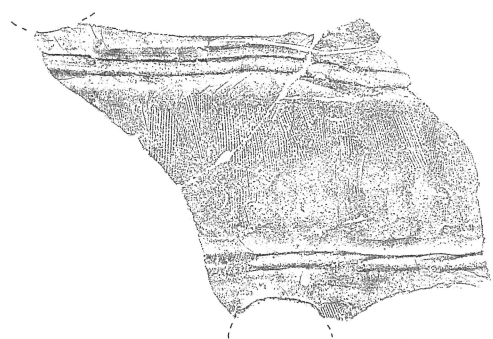
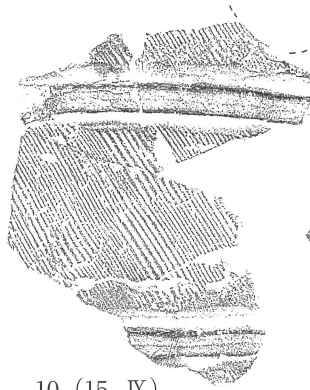


写真5 8の内面



9 (16 IXb)



10 (15 IX)



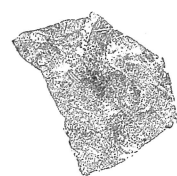
12 (18 IXb)



11 (18 IXa)



13 (13 IX)



14 (16 IXb)

0 20cm

第5図 埴口丘陵 出土品実測図(2) 円筒埴輪胴部(1/4)

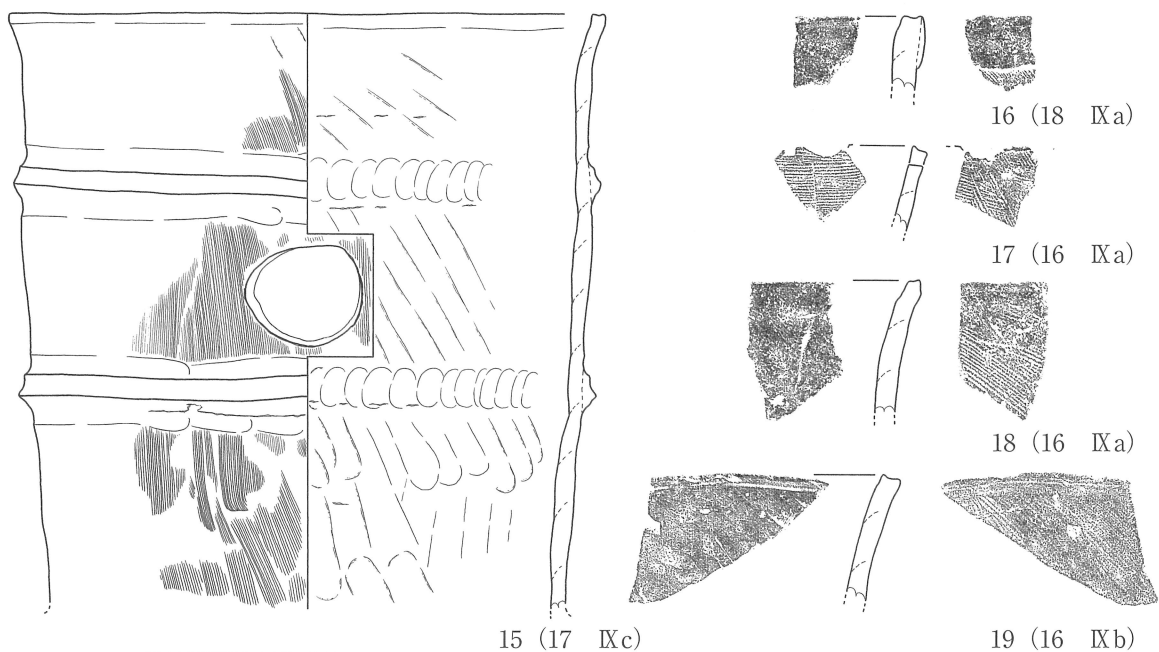


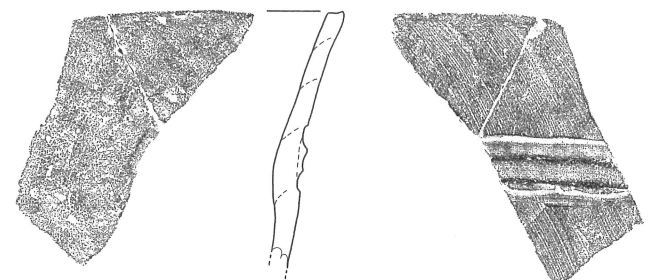
写真6 13の外表面



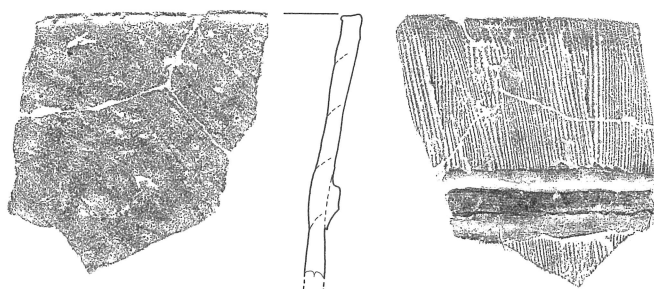
写真7 14の外表面



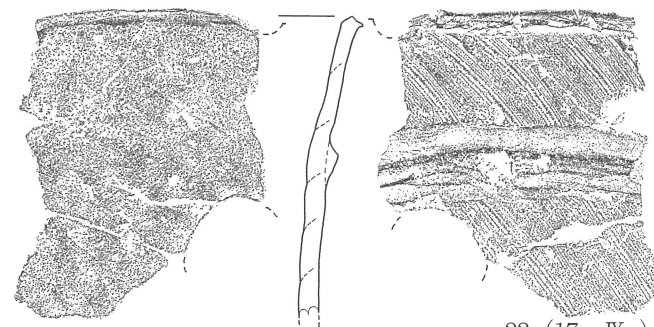
写真8 22の外表面



20 (18 IX)



21 (17 IXc)



22 (17 IXc)

0 20cm

第6図 埴口丘陵 出土品実測図 (3) 円筒埴輪口縁部 (1/4)

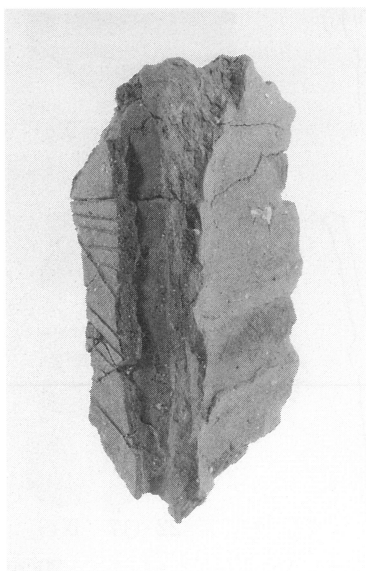
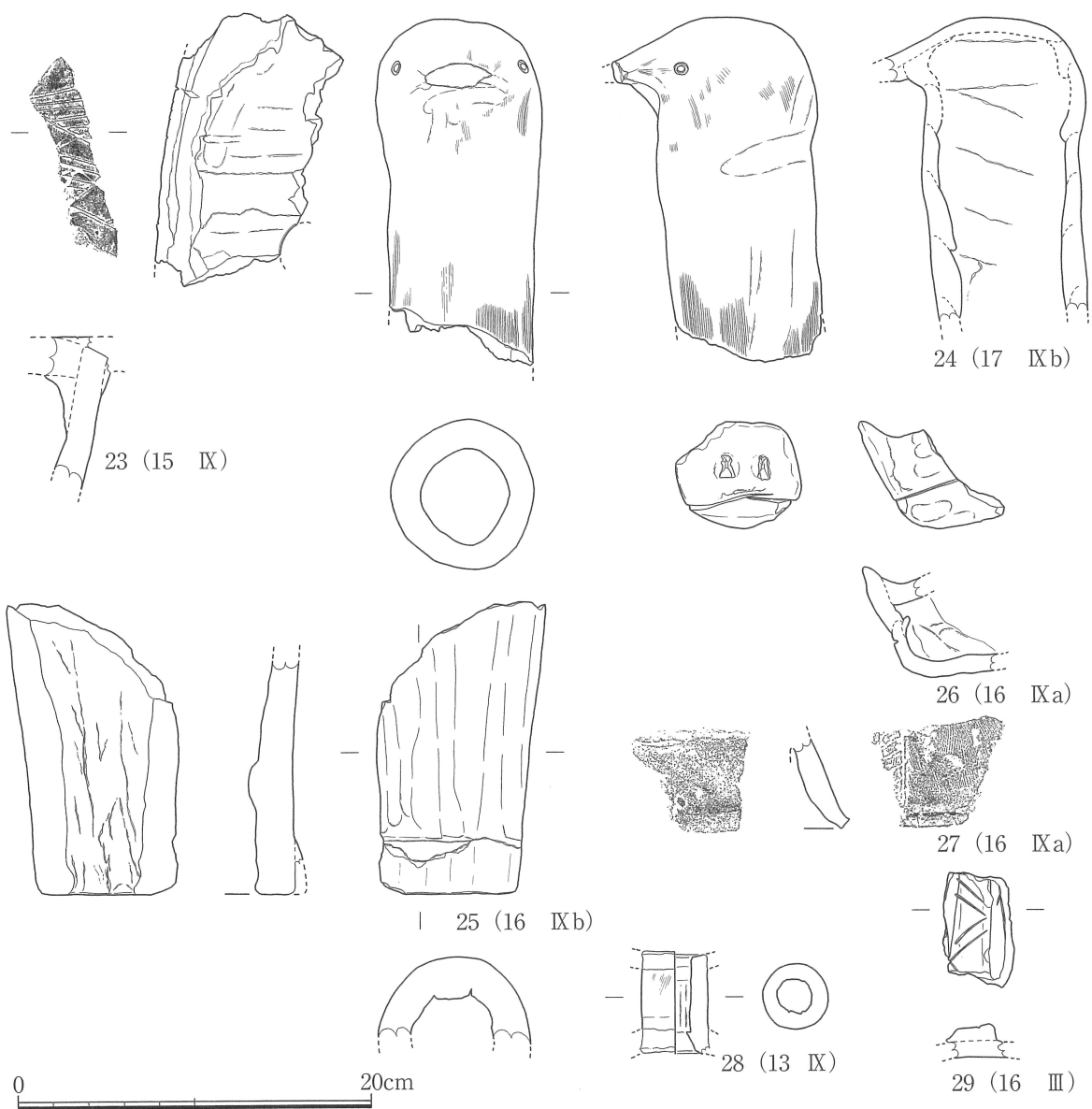


写真9 23の外面

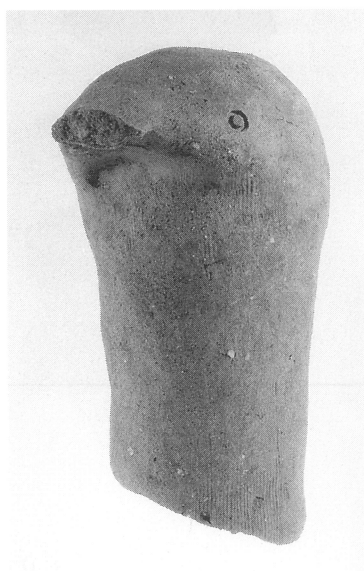
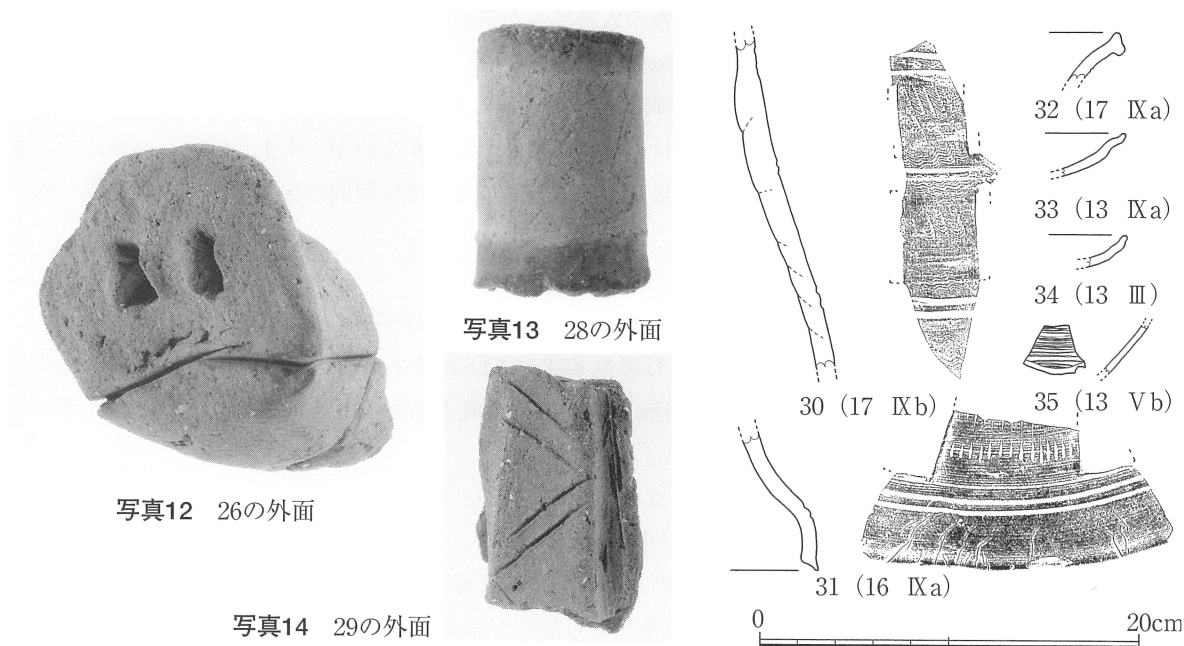


写真10 24の外面



写真11 25の外面

第7図 埴口丘陵 出土品実測図 (4) 形象埴輪 (1/4)



第8図 埴口丘陵 出土品実測図 (5) 須恵器・土師器など (1/4)

本陵出土品で少数確認でき、前号の18頁第9図に掲載した4の資料に似る。16は貼付口縁とされる口縁部形状のものである。17、22は口縁端部に半円形のえぐりがみられる⁽⁹⁾(写真8)。

23～29は形象埴輪の破片である。23は鋸歯文がほどこされていることから盾形埴輪の破片と思われる(写真9)。断面をみるかぎり、円筒部分に盾面を貼り付けているわけではないので、比較的上部の破片であろうか。24は水鳥形埴輪の頭部付近の破片である(写真10)。幅広の粘土帯を円筒状に巻き上げたのちに、それを粘土板でふさぐようにして頭頂から嘴にかけての部分成形していることがわかる。嘴の細かい成形方法は欠損して不明であるが、その粘土板を嘴の先端で折り返していたのかもしれない。なお、目の表現はいわゆる竹管文と同じである。25は馬や猪などの四足動物の脚部の破片である。粘土紐による成形ではなく、粘土板を丸めて成形したようで、内面には絞目が見られる。外面調整は板ナデで、接地部分付近には粘土を付加して蹄状の表現をほどこしている(写真11)。26は猪形埴輪の鼻部分の破片である(写真12)。口の噛み合わせのラインを線刻で表現し、鼻孔もへら状の工具を何度か突き刺すことによって表現している。成形方法は粘土板を筒状にしたのちに、下顎側のみ端部を少し上へ折り曲げて、最後に鼻孔部分の粘土板を貼り付けたものと思われる。27は人物埴輪の裾部分の破片であろう。28、29は器種不明である(写真13、14)。

(2) その他の遺物 (第8図)

30～32は須恵器の破片である。30、31は器台、壺などの脚部の破片である。24や26などの形象埴輪などと共に出土したことから、外堤において埴輪とともに須恵器がもちいられた可能性がある。30は破片の中ほどで粘土紐の傾きが変わっており、倒立して成形されたものと思われる。32は甕の口縁部である。33、34は土師器の皿の破片である。33は平安期のものであろうか。原初堆積土上層(IXa層)から出土したもので、原初堆積土の形成時期を類推する資料となろう。35は中世の瓦器碗の破片である。内面には暗文がほどこされているが、破片資料であり詳細な帰属時期は不明である。Ⅶ層(本誌第58号参照)に含まれる遺物より古いものであれば、「原初堆積土」の形成時期の下限を探る手がかりとなろう。

(3) 出土遺物の傾向

今回の立会調査で出土した遺物の傾向は、前号で報告した事前調査時の所見を覆すものではないが、若干ながら新たな知見をえることができたので以下にまとめておきたい。

今回の立会調査では濠内の外堤側にトレンチを設定したが、埴丘側に設定した事前調査とは異なり、形象埴輪が出土した。前号でも指摘したとおり、形象埴輪は埴丘側ではなく外堤に樹立されていた可能性が高い。

なかでも北側のくびれ部の対岸あたりに動物埴輪や人物埴輪が集中するようであり、これらに伴うのかは不明ではあるものの須恵器も出土している点が興味深い。

いわゆる原初堆積土とされるⅨa層からは平安期の土師器皿と考えられる33が出土しており、Ⅸa層は平安時代には形成されたものと判断される。近世遺物は図化したものがないが、出土していないわけではなく、前号で報告した様相を示す。ただし、出土量は事前調査時に比べて圧倒的に少ない。(加藤一郎)

まとめ

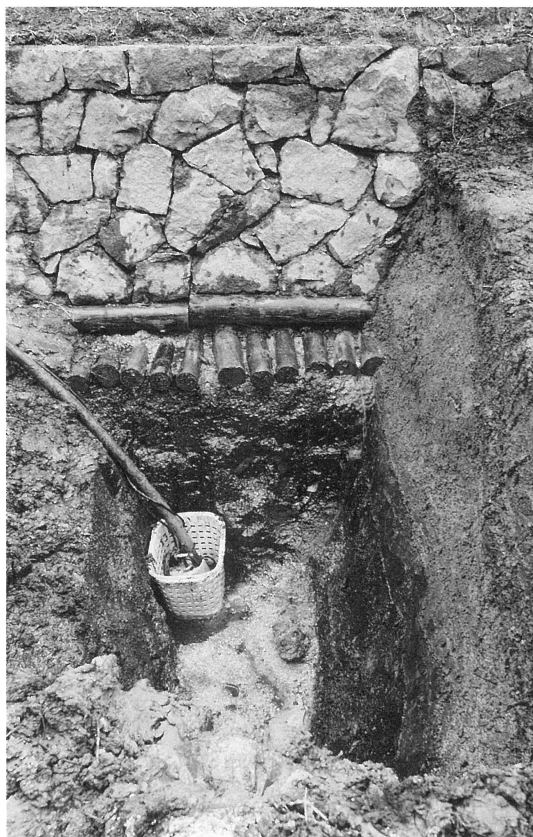
以上、今回の調査において明らかになった点についてまとめると、以下のようになる。

- ① 濠底面のレベルは前方部正面付近においては標高84.7～84.8mであるが、くびれ部～後円部付近においては標高84.1～84.3mであり、約50～60cmの差がある。前方部側の方が地形的に高いため、それを反映したものであろう。
- ② 濠底面の高さの関係は、墳丘の北と南でほとんど差はないが、Ⅸ層の厚さを比較すると、全体的に墳丘北側面に向かい合う第16～18トレンチの方が厚い。
- ③ 濠底面のレベル差に対応して、Ⅸ層確認面の高さも前方部正面側のトレンチが高く、くびれ部～後円部側は低い。ただし、第15トレンチについては削平の可能性が考えられ、1箇所だけ低い。
- ④ ①～③に関して、Ⅸ層検出面が高い箇所ほどⅡ・Ⅲ層の厚さは薄くなる。
- ⑤ 遺物は、特筆すべきものとして形象埴輪の存在が挙げられる。形象埴輪片は外堤側の各所で散見されるが、特に、墳丘北側面に向かい合う第16・17トレンチからは、人物埴輪のほか、動物埴輪として水鳥と猪などが新たに出土した。この付近は過去の調査⁽¹⁰⁾においても人物埴輪と考えられる破片が出土しており、周辺において器種・量ともに豊富な形象埴輪の配列が推測される。形象埴輪の在り方に関わる、墳丘との対照的な様相がより明確になったといえよう。
- ⑥ ただし、より外堤に近い位置で出土したことは確かであるが、過去の調査を含めても、形象埴輪が出土した地点の周囲で本来の外堤の存在を示すような兆候は、土層断面などからも確認できていない。外堤の正確な位置、あるいは外堤以外の遺構が存在する可能性については、今後の調査を待ちたい。

(清喜・加藤)

註

- (1) 清喜裕二・加藤一郎「飯豊天皇 埴口丘陵墳塋護岸その他整備工事に伴う事前調査」『書陵部紀要』第58号、宮内庁書陵部、2007年。
- (2) 土生田純之「埴口丘陵外堤の樋管改修箇所の調査」『書陵部紀要』第31号、宮内庁書陵部、1980年。
土生田純之「埴口丘陵外堤護岸工事区域の調査」『書陵部紀要』第32号、宮内庁書陵部、1981年。
土生田純之「埴口丘陵整備工事区域の調査」『書陵部紀要』第34号、宮内庁書陵部、1983年。
- (3) 底部調整をおこなうような時期の円筒埴輪の第1段高については、製作者が製作開始時に意図した第1段高とは仕上がりが若干異なる可能性があることも考慮に入れておく必要がある。
- (4) 鐘方正樹編「菅原東遺跡埴輪窯跡群をめぐる諸問題」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要』1991、奈良市教育委員会、1992年。
- (5) 鐘方正樹「中期古墳の円筒埴輪」『史跡大安寺旧境内Ⅰ－杉山古墳地区の発掘調査・整備事業報告－』（『奈良市埋蔵文化財調査研究報告』第1冊）、奈良市教育委員会、1997年。
- (6) 同様の工具痕は宣化天皇陵出土埴輪でもみられる。
宮内庁書陵部陵墓課編『出土品展示目録 埴輪Ⅴ』2006年。16頁(44)参照。
- (7) 前掲註(4)書。なお、今回の出土埴輪のなかで「断続ナデ技法B」が確認できる資料はこの破片のみである。
- (8) 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2・4号、日本考古学会、1978・79年(『古墳時代政治史序説』塙書房、1988年に再録)。
- (9) こうした例は奈良県高取町市尾墓山古墳でもみられる。ただし、市尾墓山古墳例のほうが形骸化しているようにみえ、やや後出するようである。これは円筒埴輪の様相からも首肯される。
- (10) 河上邦彦「新庄町飯豊陵外堤の調査」『奈良県発掘調査集報Ⅱ』奈良県文化財調査報告書30、奈良県教育委員会、1978年。
および前掲註(2)書。



1 埴口丘陵 第14トレンチ 完掘状況



3 埴口丘陵 第15トレンチ 完掘状況



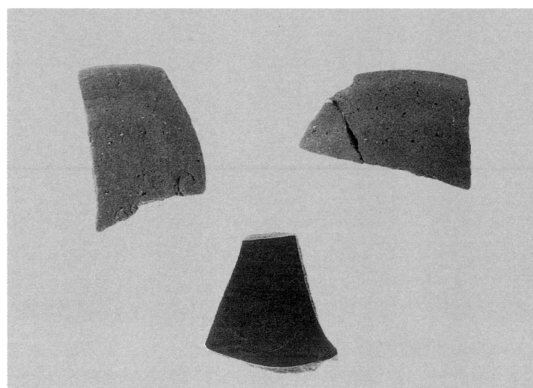
4 埴口丘陵 第15トレンチ IX層石材検出状況



2 埴口丘陵 第14トレンチ 土層断面



5 埴口丘陵 第16トレンチ 土層断面



7 埴口丘陵 古代～中世遺物



6 埴口丘陵 第17トレンチ 完掘状況